

「リメイク」する 女ゴコロとは?

「母のウエディングドレスをリフォームしたドレスで、結婚式を挙げました」
「祖母から譲り受けた指輪を、ネックレスにリメイクして大事にしています」

最近、20~30代の女性から、こうした言葉をよく聞く。

短いサイクルで次々新商品を販売するファストファッションがブームとなる一方で、リメイク、リフォームしながら、古いものを大事にする動きも起こっている。

母のドレスをリフォーム

東京都に住む30代の会社員Aさんは結婚が決まると、ドレスのリフォームを手掛ける店舗に、母が30数年前に着たウエディングドレスを持ち込んだ。「母が『いつか娘に』とっておいてくれたもの。キレイに保管してくれたが、デザインが古く、サイズも合わなかったので、リフォームに踏み切った」と話す。

ここ数年、こうしたオーダーが増えているそう。リフォームしたウ

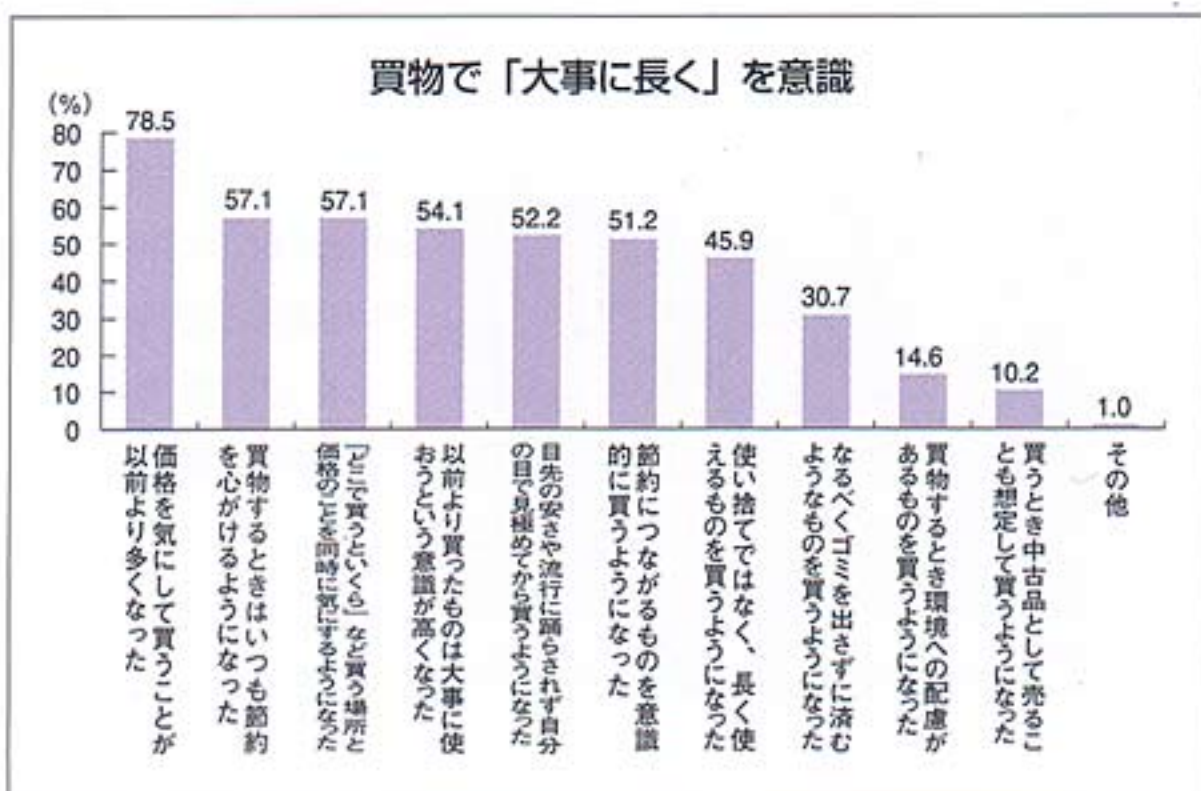


日本リ・ファッション協会主催のコンテストで入選した「リ・ファッション」作品

エディングドレスをさらに仕立て直してパーティードレスにしたり、残った素材でポーチのような小物類や赤ちゃん用のベビードレスを作るケースもあるという。

総務省のサービス業基本調査(2004年)によると、衣服のリメイクやリフォームに関するビジネス「衣服裁縫修理業」の市場規模は1127億7600万円。10年前と比べると倍増に近い伸びだ。不況の影響やエコ意識の高まり、「もったいない」の浸透などが要因と言われている。

博報堂買物研究所の「不況下の買物意識レポート」(2010年)では、買物意識の変化について、「以前より買ったものは大事に使おうという意識が高くなった」「使い



出所：博報堂買物研究所「不況下の買物意識レポート」2010年
「不景気になって買物をするときの意識がどのように変わりましたか?」(女性、複数回答)



石田 美穂(いしだ みほ)氏
エディター・ライター
有限会社インフィニティ
チーフエディター
http://www.hachinoji.com/

1968年東京生まれ。日大藝術学部映画学科(脚本)卒業後、家具販売会社に入社。社内情報誌の編集及びマーケティング業務に携わる。退社後、映画館スタッフ、フリーライター、エディターなどの経験を経て、2003年、インフィニティに入社。編集、取材、執筆業務では、イ

ンフィニティ代表・牛窪恵の著書「男が知らない「おひとりさま」マーケット」「独身王子に聞け」「草食系男子「お嬢マン」が日本を変える」などの一部取材も担当。現在はマーケティング業務を中心に活動し、マーケティング調査の企画、立案、分析、コンセプトワークなどを担当している。

有限会社インフィニティ:
東京都港区新橋 5-25-1 新橋
ビジネスガーデン1F
03-5921-0747 (代)
2001年4月設立。代表取締役はマーケティングライターの牛窪恵。各種マーケティング業務、新聞・雑誌・テレビ番組・WEB等の企画制作などを行う。

捨てではなく、長く使えるものを買うようになった」と回答した女性が40~50%にもなった。

先のAさんも、指輪をリメイクしたBさんも、「せっかくのドレスをムダにしたくない」「昔のものは品質がいいから、使わないのはもったいない」とクチにしていた。

しかし、彼女たちがリメイクやリフォームをするのは、何も「節約」「もったいない」だけが理由ではない。

「思い」を引き継ぐ

2011年3月4~5日、女性と仕事の未来館(東京都港区)で開催されたイベント「女性デー 2011」の会場で、衣類を持った女性たちが次々と訪れた。

彼女たちのお目当ては、一般社団法人日本リ・ファッション協会(東京都中野区)の出展ブース「リ・ファッション パーティー」だ。同協会は「いいものを長く愛用するために」と、「リ・ファッション」というライフスタイルを提唱しており、衣服を中心に、リユース、リフォーム、リサイクルなどの活動を行っている。その一つが、このリ・ファッション パーティーだ。

参加者は、着なくなった服やファッション小物を持ち込み、代わりに、誰かが持ち込んだなかに気に入ったものがあれば、持ち帰ってよい。いわば、洋服の交換会。

持ち込む衣類には、その服にまつわる思い出や引き取り手へのメッセージを書き込んだ「エピソードカード」を添える。

「持ち帰る服を選ぶとき、たいていの方はカードのメッセージもじっくり読みます。見ず知らずの方のものが、ぐっと身近に感じられるのでしょう。元の持ち主の思いも受け継ぐ感覚でしょうか」と、スタッフの松岡真知子さん。持ち込んだ人、持ち帰る人が同席していれば、一緒に記念撮影を



洋服の交換会「リ・ファッション パーティー」で参加者同士をつなぐエピソードカード

することもあった。

そう、ここに、もう一つの女ゴコロが見える。

単に「節約したい」「ムダにしたくない」だけでなく、リサイクルショップに買い取ってもらったり、オークションに出す方法もある。なぜ、わざわざ手間のかかる方法で引き継いだり、手放したりするのか。

日本リ・ファッション協会の代表理事、鈴木純子さんは、その心理をこう話す。「着ない服をクローゼットに溜め込んでしまっている女性の多くは、『思いさえ整理がつけば手放せるのに……』とおっしゃるんです」

同協会が活動のなかで「皆さまの『思い』も引き取ります」と訴えると、多くの女性から反響があるそうだ。

前出のAさんの母、Bさんの祖母は、思いを伝えられる娘や孫だからこそ、大事なドレスや指輪を引き渡したのだろう。引き継ぐ側のAさん、Bさんも、思いまで含めて、価値と感じたはずだ。

女性はもともとコミュニケーション意欲が高く、共感したい気持ちが強い。親子や友だちでなくても、「つながる実感を持ちたい」「思いをつなげたい」のが女ゴコロ。ただモノをやりとりするだけでなく、ココロをつなげる仕組みが作れば、よりいっそう女性の心をつかめるのではないかな。